

日本・地域経営実践人財養成講座

—居合わせた者よ、いきさつの語り部となれ—

平成 24 年 9 月 17 日

目次

- 1 はじめに
- 1 岡田先生あいさつ
- 2 葉狩さんの講演
- 3 寺谷さんの講演
- 3 全体協議
- 5 全体討議
- 5 編集後記

はじめに

第 3 回の人財塾が平成 24 年 9 月 2 日（日）に京都大学黄檗プラザで開催されました。

今回は山郷地区振興協議会の会長を務めていらっしゃる葉狩健一さんに智頭町でのゼロイチ運動の現状を発表していただき、続いて寺谷さんから、これまでのいきさつやその裏話を聞かせていただきました。

また、今回から横山昇平さんが新たにメンバーとして加わりました。

スケジュール

- 9:30 ～ 10:00 岡田先生あいさつ
- 10:00 ～ 11:15 葉狩さんの講演
鳥取県智頭町のゼロ分のイチ運動
- 11:30 ～ 13:30 寺谷さんの講演
何故、ゼロ分のイチ運動を企画したか
- 13:30 ～ 15:30 全体協議
ゼロ分のイチ運動新規性・可能性と限界
-地方に自治は育つか-
- 15:30 ～ 17:00 全体討議
7 月 15 日～
四面会議システム責任分担推進状況

岡田先生あいさつ

今この時、人財塾を起こしたことを、後世「よくぞあの時起こしてくれた」といわれるべき行動にしたい。又、そう言われるべき活動であると信じている。

東日本大震災に続き、今夏の京都宇治や熊本阿蘇の水害など、千年に一度といわれる様な災害が、今我々の前にふりかかっている。災害が起きると地域や組織の弱いところがあらわになるが、これをある意味「千載一遇のチャンス」と受け止めた。地域の「まちづくり」として、弱点を乗り越えこれを逆手にとるアプローチ、地域・組織の中に見えたほころびを普段から繕うという実践活動が、一見遠まわりのように見えても大切なことであると思う。その地に住んでいる人が災害によって見えた地域のほころびを伝え、支援する者はその地域の人のことを理解し対応することで、解決のための方策を見つけていかななくてはならない。解決の方法は小さい地域を対象にするほど現実味がある。これこそ、ここで取り上げている「まちづくり」に繋がることである。このたび、人財塾をサポートする方策として、助成事業に応募することも試みている。その成否はともかく、人財を育てる事と同時に、災害・防災についての研究や教育活動を現場に届けることを両輪として、人財塾が駆動力となって行くことを期待している。

葉狩さんの講演

鳥取県智頭町のゼロ分のイチ運動

ゼロ分のイチ運動を単なる地域のイベントに終わらせてしまってはいけない。ただ、活動も5年目になり、くたびれたなどの本音も出始めている。そんな今こそ踏ん張り時だ。産業がこの地に興るようにゼロ分のイチ運動をさらに進めていきたい。



◆ 「創造的昔帰り」をテーマにした動き

「小さな自立社会を目指したこの発想をもとに住民意識や行動には大きな変化が生まれ、自立目線で、自分たちが今持っているものの活用が始まった。

地区内にある鳥取自動車道『福原 PA』。何もしなければ単なるバス停が、岡田先生からの提案もあり、『防災拠点』『ミニ道の駅』、その他イベントの拠点に移っていく様は、まさに『まちづくり』への発想を刺激してくれる事例となっている。」

「6校あった小学校の内5校が閉校となっても、5校分の利用場所を持っていると発想が転換され、畳を敷きカラオケが置かれ、老人や子供が集う場所に変身を遂げた。土地柄、人柄を生かした活動は『民泊』として外部からの人集め、観光、交流の輪づくりの動きとなり、現在の智頭町・山郷地区にとっては経済的・精神的に不可欠とも見える活動となっている。」

「今後は『安全安心』の面だけでなく、『住民グループ企業』や『雇用創出や賃料収入』といった側面も見据えて地区の財産をもっと活かす方法を考えたい。」

◆ 現在の状況

「種々の構想をねり、実行、展開へと進めてきた活動ではあるが、高齢化、独居、さらに人口の減少は止めようもない事実としてある。やめてしまおうかという人も多くはないし、役員だけが集まって何かやっているという感じも否めない。」

「しかし、本来防災活動から始まった種々の動きを、単なる地域のイベントに終わらせてしまってはいけない。活動も5年目になり、くたびれたなどの本音も出始めている今こそ踏ん張り時だ。産業がこの地に興ることをさらに進めていきたい。」

「成功の反対は失敗ではなく、挑戦しないこと」という言葉通り、持続するための挑戦をし続けなくてはならないという意志に、山郷地区の現状の中にある現在と未来の可能性を見る思いがしました。

寺谷さんの講演

なぜゼロ分のイチ運動を企画したか

「裏の話をします」から始まった寺谷さんの話は、7月に戴いた「鳥取県智頭町『日本ゼロ分のイチ村おこし運動』-住民自治システムの内発的創造-」としてまとめられた資料からは読み取れない物事の裏の動きや、土台となった様々な人間の生き様に及びました。多種多様な内容が豊富に組み込まれていましたが、ここでは特にその場の雰囲気をお伝えできればと思います。

「人間の歴史は戦いである。最小軍団は四人でいけるという発想が四面会議の四とも繋がった。」という発言から、いかに寺谷さんが「智頭町活性化プロジェクト集団(CCPT)」の結成に命を燃やしたかが窺えました。

今でこそ地域の「自主」、「自発」、「内発」、そんな言葉で語られるレベルになったものの、そこにいたるまでの様々な苦勞、やらない理由を並べる人々をどう絡めていくかなどの苦慮、苦戦も、仕掛け人としての寺谷さんに言わせれば「反対する抵抗力が強いほど定着率は高い」「対立があるほど物事は却って動く」とのこと。苦境もこのような発想に置き換えて乗り越えられたとのこと。

「何かが出来上がった時、きれいに整った結果報告だけが一人歩きをし始め、後世の者はそれを利用して次のステップに進んでいきます。それはそれで良いのですが、人財塾の塾生に求めたいのは、物事を進める土台づくりの部分に、いかにこの身をさらしていくかが肝心だということです。出来上がった時には、空中に散り散りとなり、まるで無かったかのようになる部分に、いかに多くの物語を染み込ませるかが妙味です。」と寺谷さんは一気に語った。

今、私たち塾生が人財塾を作り上げているこの時こそ、その好機に当たると思いながら、寺谷さんの裏話、経験談の熱弁を聞かせていただきました。



全体討議

午前の部を受けて、岡田先生方のコメントおよび質疑応答

岡田先生

まちづくりのリーダーに求められる点などに関して

多くの人は変化を起こすことに臆病である。よってこちらから相手に仕掛けることになるが、相手に win-win の関係であることを気づかせなければ win-win には持っていけないこともある。そのように物事をとらえる「社会システムの眼鏡」をかけることができる人が重要になってくる。たとえば「てこの原理」と呼んでいる戦略があるが、自分自身の力は小さくても、力点と支点をうまく抑えれば、大きく物事を動かすことができる。しかし、なかなかそのような「てこの原理」を使える人は居ない。また相手の器量を見極めなければならない。繰り返すが、多くの人は変化を起こすことに臆病である。このような人たちをどのようにしてこちらに巻き込むか。そこで交渉に臨む当人自身の、相手を見てとる胆力と鑑識力が問われる。そして優れたリーダーシップがある人・組織には「冷」「熱」「執」の三つが備わっている。「冷」はロゴス、論理だ。「熱」はパトス、熱意・情熱だ。そして「執」は、エトス、執着だ。熱意と執着で人を動かすことはもちろん、一歩引いて冷静に全体を見渡せる能力も必要。寺谷さんは三つとも絶妙に備えている。

(岡田先生 続き)

皆さんはゼロイチ、創造的昔帰りという言葉が理解できたでしょうか。寺谷さんと葉狩さんという役者に登場してもらうことでまちづくりの表と裏を多面的に見て頂きたかった。(中途半端な)まちづくりの弱点はともすると、エンドレス、時間限定で仕上げるという発想にならないこと。良いまちづくりをするためには、いつまでに何をどう達成すればいいのかを決めておくことが重要。また、物事を立体視すること。社会を表面だけで見るのではない。目に見えないところをどう変えていくかがポイントである。

葉狩さん

まちづくりの現状、若い人が活躍する姿がイメージできないことに関して

現在まちづくりで中心となっている人は50代、60代の人であり、最近は女性の強さが目立つ。若い人でまちづくりに加わる人もいなくはないが多くない。中山間地域とは世代交代ができないところである。高齢の方がこうだと言い切るとそれ以外のことは受け入れられない、それが過疎へとつながっていく。なんとかしなければならない課題であるが対応は難しい。



寺谷さん

交渉の舞台、地区でのゼロイチ運動が進まないことに関して

人を動かせるか、行政を動かせるか、といったときには、相手を見ているのではなく自分自身の胆力と鑑識力が試されている。交渉は人と人との関係で行うもので、話ができそうな人を見つけることも重要だし、見つかるまで粘り強く続けることも重要。

集落単位でのゼロイチ運動では難しかった行政との交渉が、地区単位のゼロイチ運動を行うことで可能になるうとしている。しかし現在、もっと交渉力を持とうという動きはない。自分自身が試されるところへ出て行く覚悟が感じられない。

地域の想いの強さが重要であり、本当に大きな意思がないとだめ。まちをどう変えたいのかを明確にしてタイミングや時の運も味方につけ、当事者意識を持ってことにあたること。そうでなければ何も変わらない。

全体討議

四面会議のグループごとに分かれ担当分野の整理、進行状況の発表

前回の報告から電子討議がなかなか進められていない状況でしたので、1 時間程度グループに分かれて議論を行い、最後に各グループから進行状況の発表がありました。詳細は各グループで取りまとめられた資料をご覧ください。

マネジメント

- ・講座で必要とする教材は岡田先生が熊本大学で開発中のものを 150 ページ程度に再編。
- ・社団法人化（初期費用 150 万円）し、事務局を設置。
- ・広報から受付・課金・ID 管理等を一括で行える HP の開設。

システム・教材

- ・講師が用いる教材の他に副読本を用意。内容はまちづくりに関するものから教養、人格形成に関するものまで。
- ・資格認定、まちづくりの成果を表彰するシステムづくりの決定。
- ・塾生同士の横のつながりや集積した知財の出版なども検討。

情報・広報

- ・どういう人がどういう想いで集まったのかを発信してゆく。
- ・発信するだけでなく受信することも重要。地域にどういったニーズが潜んでいるのか。
◇そのような取り組みも塾の授業として行えないか（→教材グループに提案）
- ・社会的な認知を得るためには口コミが有望な手段のひとつ。

人材養成

- ・これまで考えてきた初級、中級、上級を 1 年ごとにステップアップする仕組みではなく、融通の利くものとする。
- ・各級のイメージをより具体化。
◇それぞれでの目的は、初級：聞く→言語化、中級：読む→問題化、上級：集い→論文化

●今後の流れ

- ・次回の四面会議の実施に向け、各グループでの電子討議を進める。

編集後記

私事で恐縮ですが、最近、大学最寄駅にある商店会と共同でイベントを行い、交流を深め地域を盛り上げてゆこう！といった趣旨のサークルによく出入りさせてもらっています。そこで改めて感じたのは、もちろん面倒なことも多々ありますが、客側でいるよりも運営側の方が何倍も楽しいということです。もっとも、その地域では人口流出など差し迫った問題はありません。危機感も無く、ただ楽しくイベントを企画・実施するだけです。しかし、そこに人を集め動かす力があると感じました。

人が行動を起こすとき、多くは何かに対する拒否反応からではないでしょうか。しかし、物事を継続するためには楽しさが必要です。智頭町のゼロイチ運動も、人財塾も、はじめはこのままでは地域が、そしてこの国が立ち行かなくなってしまうという危機感から生まれたものですが、いずれは地域経営することの楽しさを共有し、発信してゆくことでもっと大きな流れを起こしてゆけるのではないかと想像を膨らませています。（鳥山）